

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025. 6



令和7年6月1日発行(毎月1回1日発行)第73巻第6号

No.805

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまだ北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二五年 六月号 (通巻八〇五号)

◇今月の二十首詠……篠山今昔

酒井 牧 2

■作品 [A]

山下雅子・山野幸司他 4

A 山村睦子他 18

B 山口真樹子他 42

C 山川弘美他 54

A 越地幸子他 66

■オリーブ集

岩井久美子・岩里周英他 32

◇今月の二人

丸山哲史・菅野輝子 14

私と短歌との出会い (274)

遠藤眞理子 17

■〈第一歌集を読む〉27

今村叶子歌集『カデンツァ』

— 鳴り止まぬ歌 —

安部 律

◇色のアンソロジー 〈白〉

三浦好博 30

■遊覧寄港 〈桃原邑子先生の思い出〉

本多キミ子 38

■歌壇月旦

時代の要諦

西堤啓子 39

報告・小松智子歌集『星の時間』を読む会

阿藤たつる 40

送風塔

高尾恭子 76

■四月号作品批評

A …… 福田庸子・仲西正子

阿藤たつる・田中純子

B …… 小原香里・潮田千代

C …… 泉嘉穂子

オリーブ集……もとむらしげと

十首選

岩月宏彦・辰巳洋子 53

今月の二人・作品評

久我田鶴子 16

最近の歌誌より

〔編集部〕 77

クリップ……78

神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

篠山今昔

酒井 牧

収穫終え丹波杜氏は急ぎたり妻子と別れ灘の五郷へ

ここ行きし杜氏おもえり峠道朱や黄色に華やぐ頃を

義経も一の谷へと駆け抜けけんこの村に謂れいくつも残る

かわるがわる親族に迫られ十五歳望みを断ちて家督を継ぎぬ

否応なく送り込まれしその家に四十年の介護待つとは

采配を振られて来たる道険し十五の吾は傀儡なりき

母を恋い神戸を思い泣き暮れし日々もありたり流人のように

掘りたての筍わらび花山椒ちらし寿司作る季を待ちいつ

一九四五年生まれ
二〇〇〇年地中海入社
『萬春の会』所屬
歌集に『酔いくつも』がある

長く病み季を知らざる父のため見せんと手折るみやまりんどう

雪の舞う中を素足に草鞋穿き父の葬列黙し進みき

幼な子になりたる母を助手席に乗せて走れり用なき道を

村人との親睦会に綱を引き舞台に踊りぬ「長良川旅情」

花嫁の逃げて帰りし伝えある杣道今や広き車道に

道の辺の半鐘いつしか毀たれて村の明治は悉く消ゆ

疾走する車除け得ず猪に受難の続く鹿や狸も

今し方轢かれし貂の金色を紙に包めり車列を止めて

野の花を摘み歩きたる里山の温泉施設となりて賑わう

櫓より降りくる声よし日本遺産一号なるとぞデカンショ節が

転びても只では起きぬと誰が言いし吾が手が掴みしあまたの出逢い

日々の用に東西南北峠越え運転免許は返納できぬ

作品 A

山下 雅子

卯月

・習

ほつほつと綻び初むるさくらばなこの花冷えに戸惑いおらん
 晴れやかな四月三日の誕辰に見頃の花に包まれており
 目黒川のほとりの花に包まれし卯月のいのちの九十五年
 ちははの知らぬこの世に「総領の甚六」そのままの日々あり
 曉を知らぬ春眠抱くままりハビリ中のペダル踏みおり
 娘二人の心尽くしの屈く日々豊けき食のこのありがたさ
 ケンタッキーのチキン頬張るひまこ達コケコッコを知らぬ長閑さ

山 野 幸 司

間

・沖

不登校子の閒想い夕暮れの部屋にサリンジャー頭を抱え
 青春の「ライ麦畑でつかまえて」そのまま田んぼ農民となる
 あれこれと考え悩み外に出る草一本に心休まる
 子の前に立てば先生一日が終われど放たれぬ夕暮れ人よ
 イライラもゴチャゴチャもあり教室のすべてなつかしわが教師業
 湛水の水を落とせば赤々と田んぼが起きる耕作間近か
 一人寝の真夜に一瞬目覚めたり地獄の縁に蛙と出合ふ

山 本

孟

われは今

・大

香りなき冬の花壇に雪降りて歌人たちは林檎の香をかく
 われは今奇蹟のごとく生き延びて学友は亡く歌友と親しむ
 三月の光座敷の中程に新聞一面トランプ・ゼレンスキ
 日曜の静かなる朝補聴器をつけず昨夜の草稿を読む
 家事からは裁縫が消え手書きする「便箋」の漢字書けなくなりぬ
 マラソンの終着近く苦しくも前を抜かんとわれも力めり
 われよりも先に昭和は百年に 電気用具に囲まれてゐる

養 学 登 志 子

死者の原

・破

はたてまで国旗はためく死者の原誰ひとりとして帰っては来ない
 わけ知らず軍歌唄うた幼はも老いにし胸にて詰めてぞみぬ
 祖母の作る大きな人形おんぶして「ばっちりおめねんねしないの」
 やわらかき薄絹の綾にこの魂を包んでおかむいずれに行くとも
 長いながい襷のついたる個飢だと適度な長さに切るものだけど
 ほがらかに惚けるならばよからむかあきらかなる句楽しく詠まれ
 二度三度かけ声をかけ立ち上がるついにここまで来しかわたくし

横田 敏子

ふる里の風

・福

ガラス越しの日差しがこんなに暖かい「帰っておいで」とふるさとが呼ぶ
 いそいそと転居届を提出す いよいよわが家へ帰る日決まる
 玄関へ続く小径のミニ水仙「おかえり、おかえり」と黄色い合唱
 「ただいま」と声にならない声を上げ半年振りに玄関開ける
 真つすぐに夫の遺影に手を合わす 留守のお礼と無事の帰宅を
 ひっそりと兩戸に閉ざされおりし家全開にして風を通しぬ
 頬をさす風の冷たさ ああこれがふる里の風深く吸い込む

磯田 ひさ子

大阪生れ

・森

大阪のかもめ町公園に遥空の生家跡の碑あると聞きたり
 遥空の碑あると聞きしより切なきまで心騒ぎぬ
 青春を民俗学に関はりてひたすらなりし未だに眩し
 遥空を深く知りたしと思ひしも解けざりし枷 大阪生れ
 遥空の大阪生れが横たはりやんぬるかなや辿り着けざりき
 藤井春洋を硫黄島に亡くしたる遥空生きながら死にたるならむ
 遥空の唱へし「短歌滅亡論」百年前なり胸に刺さりぬ

市原 やよひ

三月

・萬

米寿祝ぎ姉より賜ひし籠の花部屋一杯を光に満たす
 ウルトラン振り廻して末孫の今日受けている共通テスト
 五人の孫の最後となりし試験にて無事に終るをただに祈りき
 合格の発表午後の二時なるとスマホに流れる時を待ちおり
 早四年卒業式を迎えたる袴姿を空に描きて
 卒業と人字ありてそれぞれに出る子帰る子さわめく三月
 新しき住まいスマホに送り来て孫輝きぬ景色と共に

梅本 武義

幸せなのか

・羊

大雪の画面を見ては氷雨降る庭に目をやる 幸せなのか
 この前も同じ語をしたような別れて思うが日常となる
 持ち主が気付くはずだと霞道の落とし物には触らず通る
 地藏尊二体を拝み折り返す二千二百歩今日は春風
 池土手に息切らし着くや水鳥の水面をたたき頭上飛び去る
 うぐいすの間近に鳴くに付めば次の鳴く声少し移動す
 八十年ロシアに恩義何がある侵略抑留以外を知らず

大 浪 美 雪

防人

・森

低き丘屏風のやうに囲む地に憶良らと共に防人の歌碑
 一行に行くがやつとの木道に朽ちたるありて天を上げず
 やむ間なく水皺よせて水湧けりクレソン セリと緑の濃ゆく
 春の野に鶯鳴くもの歌のとほり鶯ひとこゑ鳴きてくれたり
 菜の花のなかの碑（旅衣八重着重ねて）も防人寒し
 ひなたゆく小さき流れは招くがにしろがね色のひかりを散らし
 いくさ場の絶えぬ令和に読みゆかん妻を恋しむ防人の歌

奥 田 陽 子

明日を待つ

・羊

車窓よぎる瞬時あかるし年ごとに見るしだけ梅くれないと白
 ちいさなる幸い人の求むらし葉の花を売る車に集い
 雪流れ降り積もりゆく朝の刻いまだも春は道に迷える
 路茗荷持ち帰れよと言いきたり病床に春を待ちわびる声
 今年飾らぬ桃の花咲きそろう覚えもあらず時の過ぎゆく
 土に濡れ赤おびただしき落ち椿庭をめぐりて風の吹きゆく
 一斉に桜ひらくは明日ならんそを待ちのぞみ夫は眠れる

神田鈴子

山火事

・大

山火事は見る間に広がり真夜中に燃ゆる炎を呆然と見る
消防の活動空しく夜をこめて炎は山を紙めてゆくなり
雨降らぬ幾日か過ぎ目に見えぬ山の火種の恐ろしさ知る
待ち待ちし雨降り来たり避難所に集へる人のよろこびの声
やうやくの鎮圧宣言十二日目見守るのみのわれも安堵す
津波避け山を選びて建てし家が山火事に遭ふ無念の叫び
自宅をも焼かれながらにひるむなく消火に当たる人ら尊し

上林節江

春

・済

玉葱の青芽のツンと伸びる朝三つ編みの孫高校生に
美しき十代の孫よ未来世は希望をもちて進むべきもの
「チビでブス」と喚く孫よわれに似て折れぬ根性あるではないか
欧州に生まれ育ちて身につきしドイツ語それは世界への切符
バイオリンの音色とともに心にも成長はあらん励めよレッスン
泣いた後「いい子、いい子」と自らを称えてね　そうよ再生のため
いたわられる人になりたくない私冬の猫背に棒杵を打つ

菊地栄子

面倒の壁

・海

生きているような姿でぶら下がる正月七日女郎蜘蛛死す
「発明の契機」と新聞に投書あり面倒の壁今日も見詰めぬ
草引けば出番待つと言う草の種　細かきみどりすてにはびこる
冬空をぐんぐん進む白き雲伴われゆく錯覚がする
わが歩み知ってか知らずか黄鹄鶴前へ前へといざなうことし
ラッキーと時に囁みしむ持参した人れ歯の修理簡単に済み
家陰は解けずに凍る雪うすら移動図書館へ通りゆく道

河野繁子

咀嚼

・雁

「長い足」と押し込まれつつ乗せられてディサービスへ運ばれしひと
背の高いひとではあった棚の上手の届かぬを仰ぎ眺める
あしたよりしんと雪籠もり居の心満たせる『メコン渺々』
どすん／＼とガラスに当たりし鶴の痛み癒すか物干し竿に
玄関の蔭椿の花ま盛りに蜜すいに来る大きなひよどり
九十代は置いてけぼりか早口や横文字あいてに咀嚼せぬまま
電子辞書もう作らぬと世の流れスマホの席巻危険とともに

小林能子

桜だよりー二〇二五年ー・羊

はじまりは「きんばあちゃんの花見山」桜だよりのもたらす希望
坂本龍一なき東北ユースの演奏をしづかに見守る吉永小百合お母さん
「夢千代」を演じし小百合が坂本^{isakoda}の曲に寄り添ひ読みし「かえろう」
福島に十一年の時は流れT.Y.O一期生U子巣立ちぬ
人とひとの縁に繋かれしT.Y.O我らも刻をわかち合へたり
早坂の「花へんろ」嗚呼　花見山の桜だよりに蘇り来る
チューリップの蕾ふくらみ散るさくら昼ひと気なき団地の庭に

近藤栄昭

入れ墨

・虹

水草に腰を躍らせ隠れゆく日差し苦手と朝の金魚は
鳴子百合葉下に乳歯連なりて危うく揺れる足元の風
温みくる風はおおむね南風レジ袋飛ぶ膨らみしほみ
夏くれば裸の人が多いから海が楽しい距離が近いと
砂を抱き丸まった藻屑動かないチャブチャブ音の波に叩かれ
太陽は輝き燃えるレモンケーキしっとり燃えよ今日一日は
雲型の入れ墨をした夕日落ち今日あったこと隠して暮れる

近藤芳仙

茶布巾

・信

稜線を出づる日の出の位置ずれて北に向きつつ冬明けてゆく
 玻璃赤く染めあげて射す日の光これさへあればこれさへあれば
 醬油の香たつきふつと還りくる食欲のあり癒ゆる兆しか
 茶布巾のうすく小さきを縫ふ日頃 己が手になるもののかそけし
 歩くたび物片付けてまた歩く我がくず入れは隣室に置く
 彼の人が逝きましたとふ報せさへ傘寿このかた特別でなし
 語りかくるやうにやさしき梵鐘の玻璃ふるはすに目覚むる日頃

坂上直美

女の幸

・天

女には如何なる生きのあるならん大正昭和そして今なお
 母ならば三ヶ島霞子知りてしか吾はただ名のみかすかに聞きし
 霞子には娘ありしと伝にあり「みなみ」とう名のやさしきひびき
 あの人が逝って五年 悲しみは薄らいでいく消えはしないが
 かしずかず尽くさぬ妻をよしとして「幸せだよ」と言いしわが夫
 「女王様あなたを愛し尽くすこと私の使命」と夫のたまいき
 「振り向かず黙して歩め」十三の春の朝に橋を渡りき

坂出裕子

満月

・洛

世が遠くなりゆく思ひコロナ禍の冬を久しく家に籠れば
 もうすぐに春が来るよとささやいて梅の小枝のみどりかがやく
 コロナ禍に閉ち込められてゐる日々を明るく照らす子からの電話
 まつすぐに雷を天へかかげつつ春を待ちをり花の水木が
 たがふなく春は来るらし花水木つぼみ日毎にふくらみゆけば
 腐葉土を撒きて育てし山茶花が満開の紅、土に散らせる
 もう一度月を見むとて満月の見ゆる東の雨戸開けおく

佐藤道子

空襲

・甲

一晚に十万人死せし大空襲八〇年経てやうやく頭つ
 着たまま寝てはだして逃げる防空壕B29は夜毎に襲ふ
 爆音の一瞬頭上に下がる時爆弾落つと息つめてゐき
 三月十日四谷の町は火の海で空の雲まで真赤なりしよ
 地方都市まで焼かれし大空襲時経ちて知る甲府に名古屋
 道に居れば機銃掃射にねらはれる低空飛行のB29に
 いつまでも忘れられない大空襲ガザの人等の悲しみ想ふ

篠原まり子

忘れ雪

・羊

大津への思い深しんわがひと世歌に生かされ失いしは夫
 ひ孫とう小さき命授かりて抱けば危うし体の緊張
 八十年前の惨禍は知らずしてまぼろしの国に在りし幼日
 捜しもの夕暮れとなり混沌と何を捜していたか解らず
 ベランダを一面白く被いたる雪が消えゆく風の足跡
 積もりきらぬままに吹雪きて三月の忘れ雪舞う淡き感傷
 朝まだきヴィバルディの「四季」ラジオより春は名のみか予期せぬ寒波

柴田登志恵

空の空

・天

ゆるやかな螺旋を描き飛ぶ鳶の消えてひろがる空の空なり
 かなしみを吐き出で高啼く海猫に惜しみなく日は注ぎかがやく
 がらんどうの海に日あふれタグボート一隻漕出でゆくが見ゆ
 弾力のありさうな身をならせて背黒鷗は風をとらへし
 あたたかき日差しに柔毛まき散らし猫は飛び跳ねひとり遊びぬ
 うす蒼の花芽の桜明け前の宙へとつづくゆるやかにつつく
 重きほど蓄かかぐる大辛夷朝の光に解かるるを待つ

鈴木結志

一心一芸

・福

ふでとりて日常一途夢ならぬ補陀落界の正義に学ぶ
 教えとも年輪かともことの外ふでにいちずの手習いやまじ
 大正の残像もしやわれならん名ばかり書芸されど染しも
 書に学ぶ一心一芸ゆめの世や成るもならぬもころにきざむ
 菊花賞の賞状おのが楷書文字くずさずしかと念込めて書く
 今日小満身もころをもさやかにて一粒万倍精気みなぎる
 紫陽花のいろどり変化自然体表現におぼゆふでの手習い

関根榮子

ミモザ

・埼

探し物まだみつからぬほたはたと朝より降る春の水雪
 硝子戸を開けんとしたる手を止めて椿の蜜吸う目白見ており
 蜜を吸う椿は鳥らの戦場で椋鳥来れば目白は逃げし
 猫の夢を見たとう夫が真夜中にミルクをあげたとふいに言いたり
 朝食の席で笑えず聞きており夢と現実まじりていたる
 あふれ咲くミモザの家に人影の見えたり声かけ一枝貰う
 少女の頃ミモザを知りし小説は芥川賞作家の宮澤有為男

関根和美

予言

・埼

ジョーカーを引いてしまった世界なりトランプの両手せわしく動く
 黄梅に赤き短冊「福」の文字ベトナムの旧正月に華橋がのぞく
 棕櫚の枝の黄ばみは過ぎにし一年か燃やしつくして四旬節に入りぬ
 「主がご入り用なのです」拙くも主日のミサのオルガンに座す
 聖家族しのお姿に外つ国のひとにこやかに声朗らかに
 貧しさはかくも信仰育むやアイルランドの書のかくして
 はじめより予言されたる苦しみのわが子死するを見尽くしマリヤ

高尾恭子

その後

・大

お節介なGoogleフォトが物語る〈あの日の思い出〉青い波照間
 泡盛の記憶の底をかきまわす波音かなし潮風すこし
 小綺麗な芝生がまぶしコロナ後のあなたの知らないKITEにあそぶ
 手擦れた古書をバトンと受けとめてクリーム色の頁をめくる
 よろこびの涙を飾れ抽斗に仕舞いっぱなしの二連の真珠
 右横にあなたがいない ダウンコートにつつま身のうち心底さむい
 天上をやぶって光るクレインに瘦せた寒月ぶらさがっている

高津砂千子

たんぽぽ

・零

体調の少し気になる春彼岸さくらを見んと子らと出かける
 ソックスを買うのみに待つ行列の短くはなし三十分は
 テレビでは釣りの番組しているもすることなく欠伸出ずるも
 退院しまだ本調子ではないと体が教えてくるるに従う
 待つ時間長きがゆえに草臥れて春の半日今日は歩けず
 少しずつ馴れてゆこうよこの陽気春の本番間近きらしき
 たんぽぽのひとつ咲きたる庭おもてそのみに足りカーテンを閉す

滝田靖子

同級会

・新

三〇年ぶりの同級会三〇年経てわれら前期高齢者になる
 「関根くん禿げちやつたのお」大声に言はなきやならない事なのかそれ
 禿頭も白髪もそのままの男子女子は全員髪染めてゐる
 立たされた叩かれた正座させられた中学時代の体罰言ひ合ふ
 体罰と思はねば叩かれたことも大切な思ひ出のひとつにありき
 男子らのかつてのマドンナはあの頃のいちめんの主犯と女子は知つてる
 掃り来し後のしばらく交換をすませたばかりのLINE飛び交ふ

田土成彦

動輪

・宙

はつし置く入れ歯が笑つてゐるやうで何でもない日を過ごしたあかし
三月三日三時三分外気温三度三分梅の花ひらく

役に立ちさうかと思ひためて置く物の大方役には立たず

動輪の径二メートル蒸氣にて動かす知恵は西洋のもの

星は昂 背く輝く宿命は一億年後に爆発と言ふ

楽園といふも規律の厳しくて食べてはならぬ木の実みのらす

方舟を本気で探す人もゐて見つければそれはそれで楽しい

田土才恵

春落ち葉

・宙

懲りずまたスマホを探す限られた私の時間残りいくばく

ひとりぼっちそんな言葉を道連れに日暮れの川沿い自転車道を

夕焼けの光に消えてゆきそうな悲しさも失せし今日の日の暮れ

楠の木の春落ち葉敷く塀に沿いけるさふとも広がりゆける

春落ち葉塀に沿いつつ楠の木のおまけのような香り漂う

植えしあたり路は枯れ果て落の藁ひょっこり芽を出す寒の戻りに

路の藁伸びゆくまでの幾日か春のひかりをじんじん滲ませ

玉井綾子

髪一本

・羊

子が暮らす家と実家の合鍵をまとめて提げるキーリング買う

急激に衰えし母は昨日まで私は出来たと機器を疑う

不安症過度なる母にキッチン照明点かず明けやらぬ空

生協の米が抽選販売となりて不安な母なお不安

電話機がレンジがどうする壊れたら 母の声音が母を渦巻く

買い換えし受話器で耳を押し付ける母には誰の声も届かぬ

流しても指にまとわる髪一本 母の背を撫でることしか出来ず

中島央子

三月尽

・森

快音を空に打ち上げ疾走の高校球児の力のまぶし

遠き日の写真に残る甲子園紅顔只中 第二人

望みなど無きと言ひつつ近海の鮎色美しカルパッチョ食む

昼の湯にひと指ひと指足指をつまんで聞くころばぬやうに

点滴は一日をかけて落ちてゆく我が体内の何処をめぐる

三月の終らむとする昼日中ストゥツ焚けば小犬寄り来る

三月尽咲き遅れぬしシクラメン 紅深く鉢あふれさす

永田進一

アーベル賞

・山

日本初アーベル賞に柏原正樹氏ツルカメ算から数学界へ

アーモンド活けて楽しむわが家なり花屋に月命日を憶えられたり

ラジオから始まる放送百年前畑ガンバレ記憶に残る

甲子園に百一年目の雪辱を果たして早稲田は高松商下す

稲葉山吾子より登山の便りあり岐阜と改む信長の野望

ウメ地下の細道行けばお馴染の居酒屋すらり本屋は廃業

鴨鳴く朝の挨拶やも知れぬ日毎に変わる裏山なれば

永塚節子

春

・銀

なぜここにと愚痴を言いつつ春の彼岸友の墓前に両手を合わす

びっしりとつらなる墓はこちら向きいく千万の声にたじろぐ

待ちわびし春とはなれと連れ来たる疎ましきもの花粉と黄砂

思いがけず案内されたる町のはずれ小川のほとりに桜よ桜

メルヘンの世界に入りてさまようは小川のほとりの桜の樹下

その腕になべての悲しみ包みいる千手観音しだれ桜は

どうということも無けれど離れ住む友へメールを生きの証しに

仲西正子

日抱り

・沖

突として鏡に映るを振りむきてあら栗木さんと声かけており
誌上にて見知りし人らきらきらし歌人たちの年忘れ会

誘われて地中海の同人と茶房に語らう市ヶ谷の夜

市ヶ谷の師走の宴また夜景わがアルバムのふくらみていく

つつがなく流れ過ぎゆく日めくりのカレンダーを細かくたたむ

八対の夫婦の雛ひなそれぞれ物語きくわれも語らな

とりどりの花のあふるるつつじ祭り際立つ白の香に寄りてたつ

中村博子

辞めたらアカン

・漣

出目金にあらず出っ腹ゆらゆらと尾ひれ揺らめく金魚は紅白

金魚鉢の藻草を清掃してくれる赤い巻貝の仕事ぶりかな

月に一度集いて言葉紡ぎつつ社会情勢聞く喜びや

歌の師は下手と言いつつ辞めるなど短歌の世界へ留まらせ給いし

今は亡き歌の師山村金三郎「悪いこと言わへん辞めたらアカン」

桃山の学区に歌を詠みたまき友毎月集いお喋り弾む

頼りなきわがアドヴァイス厭わずに桃山会館に友ら歌詠む

西堤啓子

猫やわらかし

・天

LEDの信号のつべり見下ろして地蔵の記憶もうないと言う

均等法などなかった若きあの日々をとみに走った仲間とミモザ

シゲアキが漱石となり熊本の空の青さを好きだと言えり

なつかしきものを思えば湿原と朝コーヒーの落ちくるボタン

ネジしめてシャワーを直す段どりで繕う日々猫やわらかし

海から空へ延びる助走路くつきりと白 神戸スカイブリッジ

助六の眼すすしき大島 但馬の地よりいのち広げる

浜谷久子

冬草

・地

草取りのままならぬ膝突っ立てて小嶽を使う冬草根っこ

寒暖の乱れる春先咲きいそぐ黄の菜の花の種つけるまで

冬草に埋もれる苺の葉の土を払って五枚を整える春

霜被く大根の葉のやわらかく炒り煮は寒の極上メニュー

畑びとに應えて土が太らせる甘藍届く高騰さ中を

闇雲に進んで辿り着く藪杖の用心せめてこれから

せっかちと呑気の足し算連れ添うも時折居ること確かめながら

檜垣美保子

花びら

・昂

みずからの背中を直視せしことの一度とてなく夫の背を見き

言いたくはなき筈のことば言わせけり川岸の泥に花びらが散り

あとすこしあともう少し梅林をすぎていつしか峠越えたり

日照雨すぎてあかるき街の川ぬらぬらと濡れ泥のかがやく

とおき日の本のおまけのソノシートそのたよりなきなつかしむ宵

おにぎりの中身当てあう九歳と七十歳は花より団子

角切られ灰褐色の春の鹿ひかりを踏み花びら浴びて

福田庸子

杉山に

・今

世界中の動き右へと流れゆく戦ひ方を知らぬ日本にも

杉山の乏しき光に咲きそむる芹葉黄連花はあえかに

脆き花を貸でゆく所作もてる人ら呼びこむ芹葉黄連

ひそやかに生きつく花をネットなどに挙げてくれるな花も望まぬ

長閑の雪の暮らしを伝えてよ亡きてふたとせ半世紀の友

空の色に冬明け近し山脈の今年の雪はいまだ溶けぬも

まさやかにびーひよると啼く二羽の舞ふ我の頭上はひな曇り空

藤田美智子

花びら

・新

くもの巣にはりつきたる花びらの風の遊びにしばしつきあふ
春のゆふべを樹皮やはらかくなりゆけり本音を少し出してみようか
ためらひを見せることなくヒヨドリは白木連の花びらを食べ
ぶつたき思ひをなだめくるるなり雨の匂ひを選びくる風
室々と老いさらすことでこの根の出でふたり土のおもてに
改札の向かうに笑顔の亡父が立ついつよりわれを待ちあしならむ
伊達市民が残らず命を落とすことガザの死者数五万人とは

藤森巳行

我が食事

・銀

蕎麦を茹でジャガとサツマの天ぶらを添へて今日の昼食となす
貧しさも中くらゐなり我が食事一汁一菜プラス一品
持病あり糖尿病と高血圧食事制限薄き味なり

我の名をこれから何回書くのだらうベンのインクと寿命を比べる
二十一世紀四分の一過ぎむとす戦争止まず増える犠牲者
この世には戦争ほどの悲惨なし生命の尊厳踏み闕られる
武器持つと不安は増しぬ相手より常に優位を保たむとして

本元由美子

虚ろなの

・岡

小六の卒業式で号泣しにける私はすでに「HSP」
あさがたの微睡み覚むる戸明かりに障子を繰れば鶯の声
終活が常に脳裏をかすめて夫の蔵書が売られゆきたり
春昼に夫のあまたの研究書は古書店の車に乗せられてゆく
なにゆゑに心がこんな虚ろなの友を弔ひ帰る春の日に
死してなほ君とあたしと友の夫は魂きはるとき言ひ給ひけり
その夫は死してなほ妻と天国で共にあたしと洗礼を受く

牧雄彦

哀しみの海

・大

敦盛の首塚ありて訪ふ人のなき昼下がりに向き合ふしばし
敦盛と直実の史実知りしより須磨は哀しみの海と思ふ
早春の須磨の浜辺を歩みゆく「背葉の笛」をくちずさみつつ
ロープウェイの頂きより見る須磨浦はあまねく春の日に輝けり
敦盛も見しやとほくにきらめける紀淡海峡はた友が島
神戸空港飛びたちし機は海と陸のあはひを真つ直ぐ西空に消ゆ
西空の果てには何かよきことのあらむか雲にやや赤み差す

松浦禎子

古アパート

・羊

四十年の歲月積みしアパートのそのひと隅に生きてこゝまで
何処よりのえにしありてか子の家に飼われしハスキーわれを見上ぐる
銀次の名をつけられしハスキー犬今日はわたしの孫の役目に
思いきり駆け廻りたる帰りがわが手を振る三階見上ぐ
ご無沙汰もひと月を過ぎふと気付く九十代の同志の友を
足腰の痛まぬ今日の幸いを古アパートの夕映えに向く
境川の水辺の木々も春めきて老いそのままのわれをいざなう

松本多摩子

願い

・桜

雨よ降れ願ひは天に届きたり未曾有の山火事あゝ鎮火せり
曲がり角曲がつた先に見えるもの老後のくらしおだやかにあれ
生きがい無くせし穴を子が埋める花見に来ないか誘いのライン
春近し友の誘いでハイキングうぐいの初音短く聞こゆ
ひさびさの電話は孫のさくらより花粉症とぞはなごえ聞こゆ
早くから酷暑の予感三十度三月なのにどうなる地球
ランの鉢抱えて帰るいつもの道仕事を終えて万感の夕

三 浦 好 博

屏風ヶ浦

・ 鮎

「夢十夜」の岸と思ふよ気がつけば屏風ヶ浦にいつも来てゐるこの世をばすべて暖色に塗り替へむ屏風ヶ浦に沈む太陽昨日より直濃くなるこの丘に屏風ヶ浦の潮騒届かず宇宙から降りしひとの話聴く「Pale Blue Dot」思へり遙かなる青き地球を見せ呉れしアポロを思ふ今宵満月寒けれど春が来た来た静江さんストックあまた台車に持ち来我が仕込みし甘酒の香が満ちてゐる歌会の果てて帰り来たれば

三 木 ま り

奏

・ 昂

蒼々と響くチェロのコンチェルト奏者は眉間に皺寄せ奏でるくぐもった柔らかな音に亡き父の含羞むような笑顔が浮かぶ亡き父の声は夢に遠ざかるシュヴァルツワルトの深い闇へとこの胸に昏く静かに降りつもるドイツ歌曲のバリトン深く旋律が少し狂って柔らかな調べ奏でる父のピアノよ窓ほそく開ければいまだ肌寒く甘え上手な猫が寄り来る宇宙からの交信かしら 耳鳴りは幼い頃の密かな楽しみ

宮 本 靖 彦

内裏雛

・ 俊

子の妻が褒めてくれたり内裏雛我等贈りしは三十年前芝と苔庭に争ひ土分くるいづれも植ゑし吾の浅はか紹興ゆ持ち帰り植ゑて四十年庭の三極白花綴乱絢爛をほこりし庭の冬椿今枯花を樹下に敷く哀れ吾が植ゑし菊葉はすべて鳥の餌皿に残りし荒草を引く名に合はぬ木瓜の苔の小さが枯枝に満ち紅き灯点す早歩き自慢せし我も女生徒に抜かれ及ばず信号のがす

三 好 聖 三

舟

・ 伊

笹らのさかんな会話を聞いている春めく朝に腰を下ろしておちこちに木の実を隠しゆく秋の大雪高原城の蝦夷栗鼠入江には無人の舟の浮かびいて僅かに向きを変えてゆきたり長すぎるプラットホームの無人駅はらりと雪の落ちてきにけり客人の顔あらわれてしんしんと降る雪をあゆみ来肩ならべ雨を見ているカビバラの背中にほのか哀愁のある髪ほそくすくすくたる脳天にキャップをふかくかぶせやるなり

御代田 澄 江

ムスカリ

・ 茨

ムスカリの青き瞳に見初められ買ひ来て植ゑぬ道辺の鉢にムスカリの鉢に春風訪ひ来たり首振る姿踊れる如し雨の節分傘差し通ふ紳士ありその早足の若さ羨しむ雪降るの予報は外れ雨の朝枝の枝に刺す鰯の頭仙台のササニシキ米に恋せしが幻の米となりにけらしも寒さに弱く病に弱きササニシキ作付け減りて幻となる忘れるし結婚記念日夫は亡く静かに供ふしじみ飯かな

もとむらしげと

和泉式部

・ そ

校門を入り来る子らの声のするひととき過ぎて満つる静けさ新学期に古典の係になりしこと告げに来し子の手文庫本参観に「父が来ます」と言いし子は足どり軽く階段のぼるまっすぐにわれを見つむる子らの顔行儀よかりき参観の日は予告せし小テストを持ち入りゆくも静かなる教室は夢のまた夢「ものおもへば」和泉式部の恋の歌書いて始まる古文の授業中庭を「見上げてこらん」口ずさみつつ三人の生徒がゆきぬ

桃原佳子 春

・沖

冬眠の熊の如くとはいかず暖かき午後買物に行く
さくらんぼの白花咲き初むちらほらと光の先に春が来ている
桜咲き山の若萌え藪椿の花は自在に小鳥を呼び寄す
三十分遅れ沖繩に無事に着く娘との会話は楽しひととき
一本の利休梅の咲き満ちて庭はしずかな日溜りを抱く
夕間にビニールハウス浮かび立つ電球明るく並び灯りて
道の辺のつくし見つけて近寄ればこれからこれから囁いているよう

久我田鶴子

保険証

・羊

タイパとかコスバとか言ひ人間の投げ込まれる巨大洗濯機
人間の機械と化せるはまがふなくへこなすこのみ考へてゐる
保険証きれていますと返されしいつしゅん膝の痛みを忘る
保険証きたる理由はわが夫のすなはち後期高齢者入り
高齢者も後期になれば扶養する資格はなしといふのであつた
扶養よりふたたび自律のなりゆきに膝をさすりぬ前途はいかに
薬牡丹のはずが菜の花咲かせをり茎の伸びたるさきの黄の色



● 地中海叢書・新刊案内 ●

- ・藤井鴻江遺歌集「風の坂道」(第954篇) 九曜書林
 - ・石田明彦歌集「ロードノイズ」(第955篇) 九曜書林
 - ・泉嘉穂子歌集「石見神楽」(第956篇) ながらみ書房
 - ・中山真弓歌集「空色のママチャリ」(第957篇) 二八六〇円＋税
 - ・牧 雄彦歌文集「メコン渺々」(第958篇) 九曜書林
 - ・久我田鶴子著「海に金槌ーわが短歌小史」(第961篇) 九曜書林
 - ・久我田鶴子著「冬潮を航くー三好直太の歌」(第962篇) 九曜書林
 - ・若松喜子歌集「文鎮」(仮題) (第960篇) ながらみ書房
 - ・鈴木明之歌集「安積春秋」(第963篇) 九曜書林
 - ・もとむらしげと歌集「よしなしこと」(第964篇) 九曜書林
 - ・御代田澄江歌集「花の小夜曲」(第959篇) ながらみ書房
- ※お問い合わせ・ご注文は著者に直接お願いします。ただし、藤井鴻江遺歌集については檜垣美保子さんに。九曜書林からの出版物については、価格の記載はしていません。
- 〔近刊〕
- ※歌集・歌書を出版される際には、地中海叢書番号をご請求ください
(「クリップ」参照)。地中海叢書として登録し、本社に保管します。
希望があれば、本誌に4ページまで無料で批評のページを設けることができます。